

明治四年五月十三日



—天草・大村移民団の上陸

遠く九州から北海道開拓の志を抱き、日本海を北上する一隻の船があった。猷龍（しゅうりゅう）丸三九八ト。百馬力の英国製蒸気帆船である。

明治四年五月十三日。長崎の港を出てから十一日目。船は今浦河を目前にしていた。重い瞼をしば叩いて目をこらすと、前方に陸らしきものが見えてくる。あれが我々の新しい土地なのか。冷たい風が遠く離れてきた故郷を思い出させる。

北海道開拓少主典朝山禄十が、北海道移民団募集の命を受けて肥後（熊本）の天草・肥前（長崎）の大村を訪れたのは、梅の蕾もほころびはじめる二月中旬のことである。集められた百姓たちの前で庄屋の読み上げた移民の条件は、次のようなものであった。

七歳以上の者に農具仕度料として十五円。家具類の運搬は無料。航海中は三度の飯、渡道後は十五歳以上に一日玄米七合。七歳以上は五合。それ以下は三合の支給。薬代無料、菜代は一人一日三銭ずつ。酒も支給。これらがすべて三年間続けられる。

百姓たちの間から、ホーツという溜め息がもれた。

その頃、天草では人が増え続け百姓たちは貧乏のどん底にいた。銀主（ぎんし）といわれる一部の大地主が、借金のカタにつぎつぎと百姓から土地をまき上げて肥え太っていく。あちこちで銀主邸打ちこわしの一揆が起きていた。命がけで勘定所に駆け込み訴えをする者も出たが、暮らしは一向に楽にならない。段々畑が天に届くほど耕され、干拓が進められ、延享三年（一七四六）に二、四五〇町歩の土地が、慶応三年（一八六七）には一・四倍の三、三〇二町歩に増えても、二・二倍にふくれ上がった人口は賄いきれないのである。大村においても似たような状態であったろう。移住することは北海道開拓のためであると同時に、自分の村を救うことでもあった。



「どがんする!？」

「そがんこついても蝦夷地ぞ。虎や熊、んづ（出）る所ちゅうがな。どがん扶助米ばもらうたっちゃ考えもんぞ」

「麦飯、唐芋ば食うても生きていかれるっとじゃあ。」

貧しい生活ではあったが、こうして今まで生きのびてきたのだ。これからだってなんとか生きていかれるだろう。

しかし、三月二十四日、天草において先に申し込んだ移住希望者三家族（小宮地村の小泉和平、大宮地村の高見半五郎、立原村の平田政治）に、約束どおり農具仕度料が渡されたという話が伝わると、半信半疑だった者たちも覚悟が決まった。役場御用掛りの月給が二円五十銭。小学校長で五円の時代である。

十五円は村人にとって、目ん玉が飛び出すような大金であった。

「新しかお上の話にや、いっちょん嘘はなかごたるぞ」

「よし、おっどんも蝦夷ば行って一旗上げてくるばい」

こうして出願者は次つぎと増え、天草郡の民二十一戸九十余人と、彼杵（そのき）郡（大村）の民二十四戸七十余人は、住み慣れた国を後にしたのである（「北海道殖民状況報文」）。

船は長旅を終え静かに入江にすべり込んできた。当時の浦河は、背丈より高いイタドリや笹が茂り、原始林が海辺まで迫っていた。そこには杵屋根の役所が二棟（旧松前藩の番屋と開拓使出張所）、民家が二軒あるだけで、あとはアイヌの住む草小屋が点在するばかりだった。まるでタイムスリップして神代の昔に下り立ったようである。子どもたちはひどくおびえて船から下りようとしな。四歳だった蓑田南兵衛はあまり駄々をこねて泣き叫ぶので、帆柱に縛りつけられたという。

その上、松前藩が和人の往来を快く思わなかったために、道が整備されていない。人家がまばらになるにしたがって道は細くなり、幌別から先では馬がやっと通れるくらいの踏み分け道となった。昼も暗い密林の中を心細さにすくみそうになりながら、それぞれの入植地である西舎、杵臼へと向かったのである。大村班の西舎入植が明治四年五月十五日、天草班の杵臼入植が五月十六日のことであった。この日から両村の開墾の日々が始まったのである。

「熊や狼、兎などが自分の天下というように横行し、放牧してある馬を襲ったり、貯蔵しておいたサケを盗んだりします。米はできませんでした。また南国に育った者にとって寒さは最も苦痛でした。我々の唯一の楽しみは酒を飲んで唄うことでありました」

「日高開発功労者事蹟録」中の岡本仁五郎（西舎入植）のことばが、開拓の祖となった先人たちの苦勞をしのばせる。

※ なお文中の日付はすべて旧暦によるものである。

[文責 河村]

【参考】

天草海外発展史（上）	北野典夫著	昭和六十年	葦書房
日高開発功労者事蹟録		昭和三年	日高教育会